1月号
平成12年1月1日
発行／編集
岡崎市教育委員会

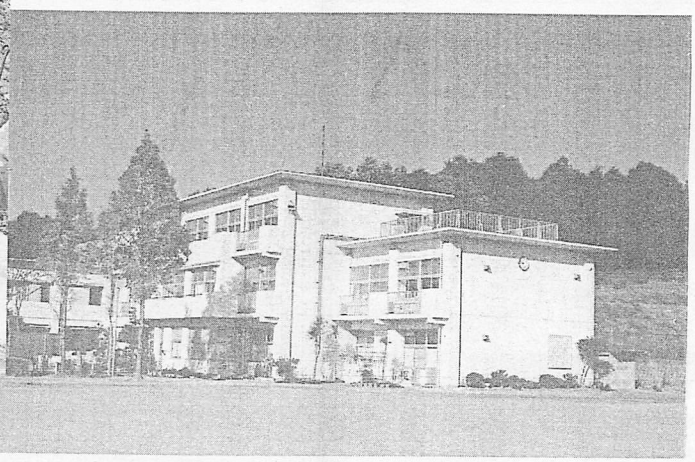
紙面から

教育随想
「岡崎市にユニークな子供科学館を」
分子科学研究所名誉教授　木村　克美　氏
羅針盤
野鳥を通して知る身近な自然
矢作北小学校長　篠田　英昭
この人に聞く
染色家　小林　敬子　氏
特集
復活「寒中水泳」
ふれあい
A男の居場所
大門小学校　武田　玲香
師弟同行
前美川中学校　鈴木　郁代
藤川小学校　喜多　芳恵
フォト・ヒストリー岡崎の教育
新設校　（昭和六十一年）

自然の中で
のびのびと

今月の学校紹介
～常磐南小学校～

▲自然薯の栽培（パイプの土入れ）



－教育随想－

岡崎市にユニークな子供科学館を

分子科学研究所名誉教授
木村克美

私は海外旅行のついでに外国の科学館を見学するのを楽しみにしている。これまでロンドン、ミュンヘン、ボストンの科学館などを訪れたが、そのスケールの大きさと内容にはたいへん感心させられた。じっくり見学すれば数日もかかる規模である。外国出張の合間にこうした科学館を訪れようとすると、日曜日の半日ぐらいしか時間がとれないが、機会があれば何度でも訪れたいところである。このような科学館が地元の子供達に大きな刺激や感動を与えていると思うとうらやましい。私は、もし子供時代にこんな科学館が日本で見学できたら、もっと早く科学に興味をもっただろうと思う。

近年たしかに海外旅行は容易になり、子供づれで海外に出かける機会も増えているので、子供達にこうした科学館を見てほしいものである。

わが国にもこうした総合的な科学館があってもいいと思う。海外から子供達が押しかけてくるような科学館をわが国につくれば、科学立国にふさわしい国際貢献ができるはずである。しかし、ここで私が提案したいのは、総合的な科学館ではなく、地方都市を代表したユニークな子供科学館を岡崎に建設してほしいということである。もし実現すれば、岡崎だけでなく、周辺の子供達にとっても素晴らしい贈り物になるし、有名になれば全国の子供達のためにもなる。

子供達の理科離れが最近の話題になっているが、子供達が次世代の日本の科学を背負うことを考えると、理科離れは大変ゆゆしい問題である。科学館の建設は子供達に明るい話題を与え、科学により高い関心を呼び起こすことは確かであろう。

ところで、これからつくる科学館はただ見るだけではなく、子供達が自分で実験を楽しめるような場であることが大切である。そこでは、また、子供達のために各種の科学教室を開くことも有意義である。さいわい岡崎には国立研究所が三つあり、分子科学や生物科学の専門家がそろっているので、科学館の建設や科学教室の開催には多くのアイデアや協力が得られるはずである。また研究者によるボランティア活動も大いに期待できる。

岡崎にはすぐれた子供美術館をはじめ沢山の公共施設はあるが、残念ながら科学館だけはまだない。こうした科学館の建設は必ず次世代の日本の科学の振興に貢献するであろうし、また子供の教育を考えるとき、重要かつ緊急な課題であると考えられる。わが国は子供達の理科離れをふせぐためにもっともっと投資をすべきだと思う。近い将来、ユニークな子供科学館が岡崎市に建設され、第二の本多光太郎博士（鋼鉄）や木村資生博士（遺伝学）が生まれることを切に念願している。（きむらかつみ）

野鳥を通して知る身近な自然

矢作北小学校長
篠田英昭

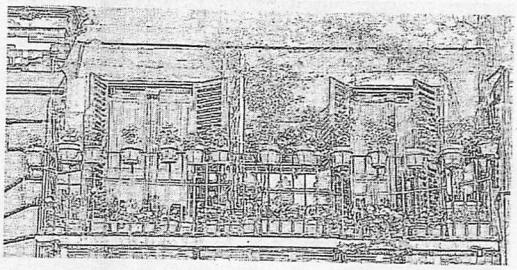
本校へ赴任した日、運動場上空でさえずるヒバリの姿を見て胸が高鳴った。宅地化などでヒバリの存在が珍しくなってきているからである。

初めての全校集会でヒバリの話をした。校歌に「柳が芽吹く校庭にヒバリも高く歌ってる…」とあるが、ほとんどの子供は、ヒバリの姿を知らなかった。ふだん野鳥を見たり、鳴き声を聞いたりしていても「心そこにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞こえず」というような状況であった。そこで私は、学校周辺で見られる野鳥について、集会で話していくことにした。

身近に見られるヒヨドリ、モズ、カワラヒワ、メジロなどの鳴き声や姿、行動の様子などをテープや写真等を交えて話し、興味を持たせるように心がけた。また、登下校時に子

ふるさとシリーズ

この人に聞く



染織家　小林　敬子　氏

晩秋を迎えた小春日和に、日本工芸会正会員で染織家の小林さんを画廊「まる庄」に訪ねた。

当日は、ちょうど小林さんが主宰する「絲織会」の紬織展が開かれていた。草木で染めた素材をもとに作られた着物や帯などが展示されていた。その作品の色合いは、深みや温かみのある印象を受けた。

小林さんに、機織りとの出会いをお尋ねすると、

「東京に住んでいる時に機織りを見る機会がありました。その時、経糸がピーンと張られて、とんとんとよい音をたてながら少しずつ織られていく様子や、その織りなす色の美しさに感動しました。」

と、懐かしそうに話された。

こうして、染織の世界に入られたわけであるが、その修業は、言葉で教えてもらうのではなく、自分で試行錯誤を繰り返しながら、「目で見て覚える」という厳しいものであったそうである。

「自分の湧いたイメージを表現するのに、着物としてのデザインや色柄はどうか、風合いはどうか、しかも、創作性豊かで自分の感性が表現され、布として確かなものを織りあげなくてはいけないということをいつも問われている。」

「昨年の三月に中国へ行き、紀元前二千年ころの布を見ました。それは『羅』という、ごく薄くて複雑な織物でした。この透ける布の美しさに魅せられて、『絽』『紗』という『薄物』に今、挑戦しています。また、自分を表現するだけでなく、みなさんに感動していただけるもの、もう少し力強くて、人の心に訴えるものを追求していきたいと思います。」

小林さんは、このように制作の苦労や今後の課題を熱く語られた。その言葉の端々から、伝統工芸に生きる職人の熱い思いが伝わってきた。

「自分でこれでよいと思ったらそこまでである」という言葉からも、どこまでも美しいもの、納得できるものを追求し続ける姿勢が感じられた。

「桜の蕾染め」が緑色であったことに感動され、二十余年もの間、若葉の色や自然の緑色を染め続けてこられた小林さん。そこには、小林さん自身の姿が映し出されている。

お話を伺った後、作品に目を向けると、その人柄が伝わってくるようで快い気持ちに浸ることができた。

（氏　名　こばやし　けいこ
生年月日　昭和十八年九月十五日
住　所　竜美南一―一―一八）

供と一緒に歩き、野鳥の姿を追いかけたこともたびたびある。

体育館の渡り廊下を歩いていると、スズメのひなの可愛い鳴き声があちこちから聞こえてくる。梁の隙間にある巣から、時々、羽のそろわないひなが落下することがある。そのひなの給餌がとても上手で、幾羽ものひなを巣立たせている六年生のM君。道端にいた幼いキジバトをチャボと一緒に育て飛しょうさせた四年生の飼育当番。彼らの優しさも全校児童に紹介した。

集会時の話を契機に、キジバトの営巣の様子を報告する子、南方への渡りの途中で力尽きたノゴマを拾ってくる子、台風で枝から落ちた巣の鳥の名前を尋ねる子など、少しずつ野鳥に関心を持つ子供も出てきた。また、本年度から自然観察部が組織され、野鳥観察に出かけている。

環境についての知識を、環境に対する関心や行動に結びつけるには、自然に触れさせ、子供の豊かでみずみずしい感性を刺激することが大切であると思う。私は、子供が地域の自然に親しみ、調べ、自然を守る環境教育に少しでも役立てばと願い、今後も野鳥（自然）について語りかけていこうと思っている。

復活「寒中水泳」

昭和30年当時の寒中水泳のスナップ。生徒の髪型からも時代の流れが感じられる。
背景のお城の張りぼては，今もなおリニューアルしながら作り続けられている。

平成11年第24回の入水風景。身を切るような水の冷たさは，今も昔も変わらない。

（以下　写真はすべて平成11年）

岡崎城を背景に市の中心部を流れる乙川。春の桜、夏の花火はもちろんのこと、四季を問わず市民の憩いの場となっている。

その乙川での寒中水泳は、戦後まもなくの昭和二十四年に始められた。当時、市内の小中学校の先生が集まって、岡崎水泳協会が設立された。協会の大きな行事として、市内の児童・生徒たちを対象に、夏に乙川で水練学校を開いた。その発展として「次は寒中水泳をやろう」という声が先生たちからあがった。当時は衣食住も十分でなく、「冬に水泳なんて」と反対の声もあったそうだ。しかし、第一回大会は大盛況で、殿橋は見物客であふれた。昭和三十年ごろには仮装して川に飛び込む人がいたり、川原で寸劇が演じられたりするなど、参加者も見物客もこの行事を楽しみにしていた。

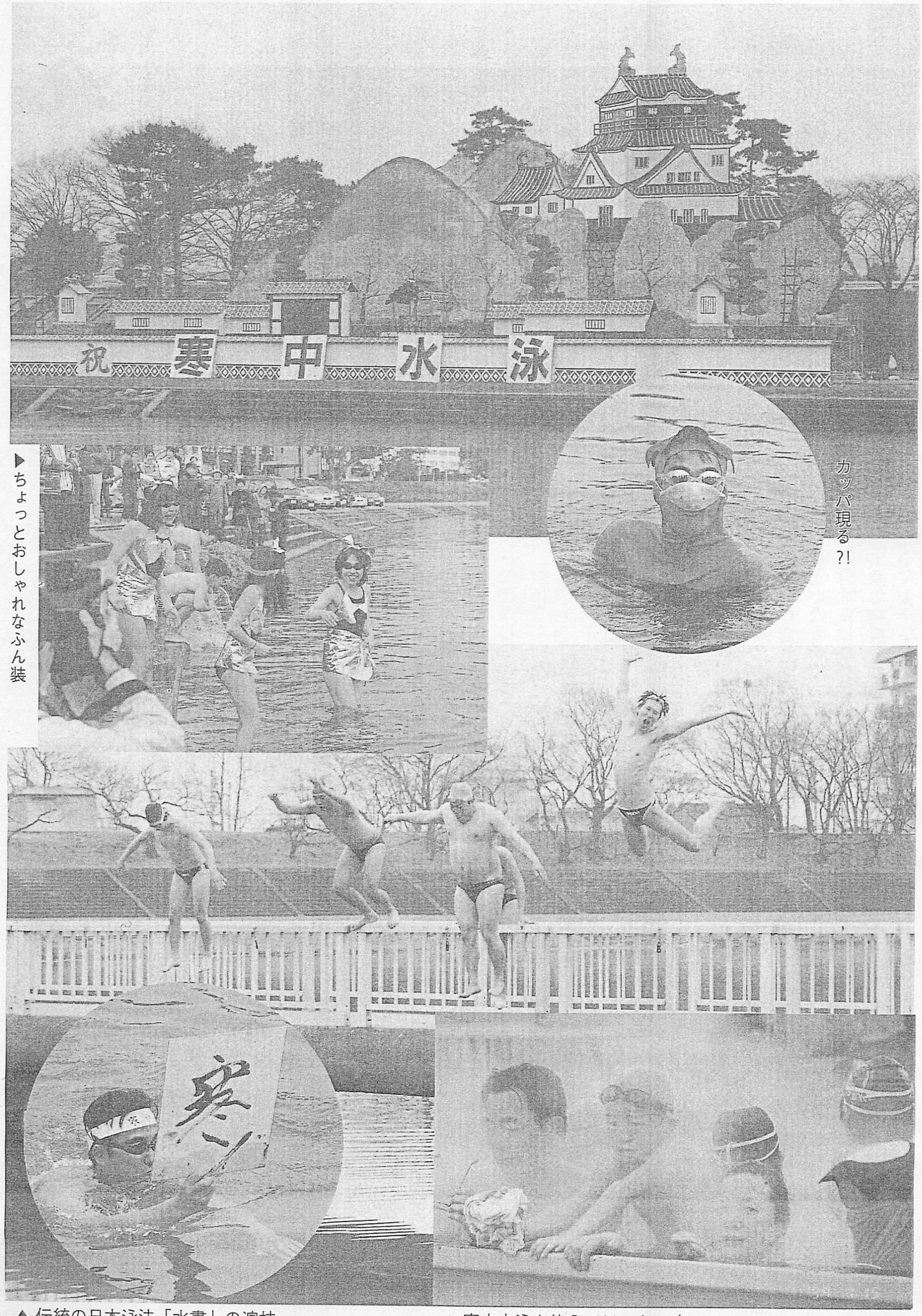
それが昭和四十一年を最後に中断された。当時の日本は高度成長期。乙川も川底にヘドロがたまったり、ゴミが投げ込まれたりして、とても泳げる状態ではなかった。昭和四十六年、水質汚濁防止法が施行され、その後乙川にも少しずつ清流が戻ってきた。

平成七年の新春、寒中水泳が二十九年ぶりに復活した。復活した第二十回大会では、日本泳法の模範演技のほか、花火や太鼓の演出で盛り上がった。以後、毎回子供から大人まで約百人が参加している。寒中水泳としては日本でも指折りの参加者数である。成人の日に行われるので、式の後、新成人が参加することもある。

かっては「天然プール」と呼ばれたこともある乙川。殿橋の川下で、今年も岡崎の冬の風物詩である第二十五回寒中水泳大会が開かれる。

▲ 気合いを入れて準備体操

▲ 城西高校「和太鼓部」による応援



▶ちょっとおしゃれなふん装

カッパ現る?!

▲伝統の日本泳法「水書」の演技

▲寒中水泳を終えてほっと一息

ふれあい

A男の居場所

大門小学校
武田　玲香

A男とは昨年度からのつきあいである。協力することの苦手な彼は、クラスの中でもトラブルが絶えなかった。自分の希望がとおらないと、上着のファスナーを引き上げ、首を引っこめて繭になる。これが五年生のやることだろうかと信じられない思いだった。

しかし、算数の時間のA男は違った。だれにも考えつかない独創的な方法で問題を解いた。「A男ってすごいよね」と、彼のひらめきのすばらしさに、級友も一目置くようになってきた。

六年生になって、再びA男の担任になった。

「先生、おれ塾を変わった。」

「ふうん。なんで。」

「前の塾は友達ができんかったもんで、今度はちゃんと作ろうと思って。」

意外な言葉だった。友達のことなど気にもしない彼だったのに。少しずつ彼の行動が変わっていくのを感じた。そういえば、このところ繭になることもなくなった。

学芸会終了後の教室で、「さあ、ほめてやろう」とした瞬間、A男は衣装を忘れたと体育館へ向かって飛び出して行った。イライラした私に、クラスの男子はこう言った。

「そこがA男のいいところ。」

その意外性が面白い。

全員がにこにこしてA男が戻るのを待っている。いつの間にか、A男の居場所がちゃんとできあがっていた。

同師行弟

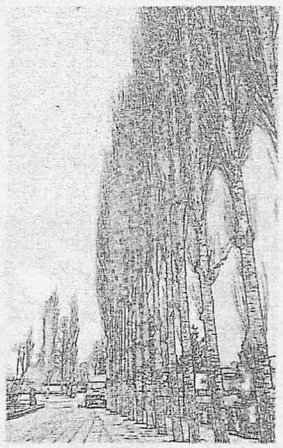
先生のように

藤川小学校
喜多　芳恵

郁代先生、お元気でしょうか。私も早いもので、教職九年目を迎えました。先生にお会いしなければ今の私はなかったかもしれないと、日々感謝して過ごしています。

担任していただいた中学三年生の折、「教員になりたい」と先生に打ち明けたとき、「あなたならやれる」とおっしゃってくださり、大変勇気づけられました。

当時先生は、香山中学校から転任されたばかりで、今までにないおしゃれな先生に、皆驚いたものでした。ご専門は国語でしたが、私たち受験生のために英単語まで教えてくださったことを覚えています。また、合唱コンクールの際には、授業後熱心に指導してくださり、クラスの絆も高まりました。私たち生徒のために情熱を傾けてくださる先生のお姿を見て、いつしか「先生のような教師になれたら」という思いが募っていきました。教師として、人間として先生にどれだけ近づけるかわかりませんが、頑張っていきたいと思います。



慈しみは自律心を育む

前美川中学校
鈴木　郁代

十七年前、香山中学校より赴任したばかりで担任した三年九組。私は戸惑い、生徒の皆さんはさぞ不安だったことと思いました。

しかし、向学心に燃え、関門を突破しようと意気込むクラスの雰囲気に感傷は許されないと知りました。一刻も早く個々を知り、家庭の意向を知ろうと四月の家庭訪問に賭けました。この時、芳恵先生のご慈愛あふれるお母様との出会いがあり、意気投合したものでした。早くから子供の将来を考え、自律心を養い、目標に向って自立することを希っていらした賢母でした。よく「この母にしてこの娘あり」と言われますが、芳恵先生はお母様のご慈愛によって穏やかさが自ずと備わり、だれよりも素直で、誠実で、自らを律し、すべてのことに好意的でした。そのころからご自分の意志でもある教師への資質が養われていったものと思います。

世紀末とは言え、今、若者、殊に女性の荒みが目立ちます。やはり、慈しみのなさが自律心を喪失させているのではと思います。芳恵先生、どうか子供たちを充分慈しんでやってください。慈しみこそ、女性教師の美徳なのですから…。

お知らせ

など、郷土に伝わる伝統芸能の継承と文化の振興に努めた。

◇岡崎市ＰＴＡコーラス連盟
コーラスフェスティバルを企画継続するなど、各校ＰＴＡ間の連携・交流に貢献した。

◆矢作川沿岸水質保全対策協議会水質保全功労者顕彰
矢作北中学校生徒会

◆第四十四回ソニー教育資金贈呈校
優良賞　緑丘小学校
優良賞　本宿小学校
優良賞　六ツ美西部小学校

◆第三十八回かんぽ作文コンクール
東海郵政局長賞
竜美丘小五年　河野　悠華

◆平成十一年度愛知県防火作品コンクール
●習字の部
県危険物安全協会連合会長賞
大樹寺小五年　星　裕樹

◆第三十九回西三河中学校英語スピーチコンテスト
●スピーチの部
入賞
南　中二年　小椋俊太郎
附属中二年　山田　麻里

◆平成十一年度愛知県明るい選挙啓発ポスター
佳作
大門小六年　石川　友理

◆平成十一年度全国緑の少年団活動発表大会
・みどりの奨励賞・松本賞
男川小学校

◆平成十一年度健康フェア
市長賞
●習字の部
福岡小六年　市川　雄基
●描画の部
羽根小六年　小林　豊
●ポスターの部
南　中三年　村田　桃子

◆第四十九回全国小・中学校作文コンクール県審査
優秀賞
男川小六年　羽田野亜衣
竜海中二年　見並　良治
佳作
緑丘小四年　櫛田いずみ
矢作北中三年　佐野　陽子

◆第十六回実践体験文発表会
県知事賞
根石小三年　荻野真那美
葵　中二年　小野田　恵

◆全国中学校人権作文コンテスト県大会
優秀賞
矢作中一年　野村あすか

◆第十七回岡崎創意くふう展
中部通産局長賞
六美西小五年　山田　毅
県知事賞
羽根小六年　三浦　裕平
日本商工会議所会頭賞
矢作中一年　中根　彰彦
市長賞
葵　中一年　成瀬　翼
葵　中一年　矢崎　成敏

◆平成十一年度全国自作視聴覚教材コンクール
●小学校部門
入選
「ふれあいのある農業―農遊館のはたらき―」
「自動車の港・三河湾」
●中学校部門
入選
「矢作川を守る―さらなる美しい川へ―」
「モンシロチョウの羽化―間近に見る生命の神秘―」
受賞は、いずれもＡＶＬ自作教材制作委員会

◆第十二回ヤング・ライスクッキングコンテスト県大会
知事賞
東海中二年　柴田　恭平
大原　和哉

◆第四十九回西三河長距離継走大会
●男子
優勝　六ツ美北中学校
●女子
二位　矢作中学校
三位　六ツ美中学校

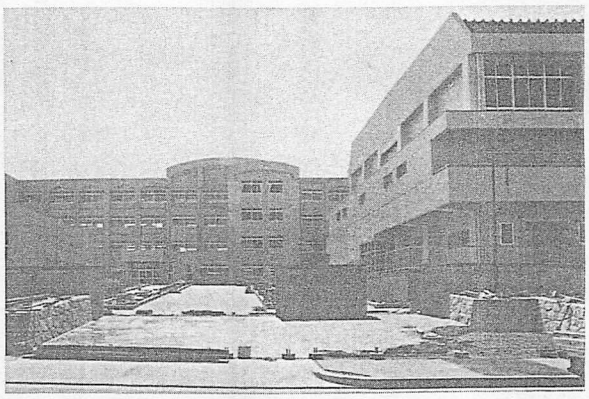
◆第四十八回愛知県中学校長距離継走大会
●男子
優勝　六ツ美北中学校
●女子
二位　矢作中学校

第二十七回教育文化賞受賞式（十一月二十日・せきれいホール）

◆第二十七回教育文化賞
（個人）
◇大石　収宏氏　（六十七歳）
市の自然や文化を調査し、多くの出版物にまとめるなど、郷土の文化財の調査・啓発に努めた。
◇三浦　重光氏　（五十二歳）
新編岡崎市史の蛾編の調査、執筆を担当するなど、生物調査を通して環境教育に貢献してきた。
◇長坂麻奈美氏（三十四歳）
六ツ美北中合唱部を指導し、全国的に高い評価を得るなど、合唱を通して音楽教育・文化の振興に努めた。
（団体）
◇岡崎市子ども伝統芸能祭実行委員会
子ども伝統芸能祭を開催する

フォト・ヒストリー 岡崎の教育

新設校
（昭和61年）



写真提供　竜南中

「香り高い文化都市づくり」をめざし、本市では、校舎建設の基本構想として、五十七年以降、従来の画一的な設計を改め、それぞれの学校の特色を打ち出すようになった。そうした時期に本校は開校した。

新設校の整備は、従来二年ないしは三年の年次計画で進められてきた。しかし、開校当初の施設格差を避けるため、校舎・体育館・プール等主要施設を一年で完成させるという事業の最初が本校であった。正面から玄関に続く赤レンガ敷きのアプローチ、紺碧の空に映える白亜の校舎、一部三階建のモダンな体育館は、その後の学校施設の先駆けとなる斬新なものである。

・カット　南中　太田正文

オアシス

岡崎城を背に厳寒の乙川で行われる寒中水泳。戦争で体力も気力もなくなった若者を励ましたいと始められた。そして復活した今も、その思いは変わらない。

次の世紀を担う若者へアピールするためにも清流を守り、冬の伝統行事を続けたい。

東雲（しのめ）開く、二〇〇〇年。新しい朝。光に溶け込みながらの初詣。敷石を踏む足音が森にこだまする。その音に凛凛となるわが身。「今年こそは」といつもとは違う夢を持ち、期待に胸をふくらませる朝。

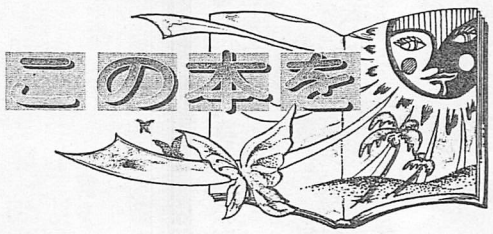
昇竜に望みを託す、二〇〇〇年。

「あけましておめでとう」と言うにはちょっと気恥ずかしい感じがする教室。遠い未来だと思っていた西暦二〇〇〇年がついにやってきた。

二十一世紀は、まさに目の前の子供たちのためのもの。節目の今年一年が明るい年でありますように。

すばらしい絹糸の輝き、それは自然の恵みから生まれたものである。「素材が生かされた布に織り上げられた時の感動は何ものにもかえがたい」と、小林さんは言われる。その感動が、探究心を支えている。感動という言葉の重みを改めて痛感した。

この本を



＊国民の歴史　西尾　幹二
産経新聞社　¥1800

＊溶ける家族と子供たち　小川　信夫
玉川大学出版部　¥2000

＊「タイム」誌が見た日本の50年（上・下）　タイム編集部
プレジデント社　¥1500

＊現代少年詩集'99　現代少年詩集編集委員編
銀の鈴社　¥2400

＊みんなの学校　池上　彰
講談社　¥1500

ＮＨＫ「週刊こどもニュース」のキャスターとして活躍している著者が，学校の問題についてまとめている。

学校制度の歴史と現状が，平易で語りかけるような文章で書かれている。ニュース番組に携わっている著者らしく，外国との比較もある。例えば，教科書。米国では，貸与で元のまま返すのに，日本は，タダだけど400億円かかっているという。ニッポンの学校の不思議なところについての疑問について解説している。